

リスクを飼い慣らしましょう

キアヌ・リーブスとパトリック・スウェイジが共演した映画に、「ハートブルー」があります（1991年制作）。この映画は、サーファーとFBIのおとり捜査官の攻防を描いた物語なのですが、映像がたいへん美しく、サーファーがなぜ Big Wave（大波）に魅せられるのか、妙に納得した覚えがあります。

ところで、サーファーにとって、波（リスク）は必要条件です。（波が存在しないと、そもそもサーフィンはできません）そして、波（リスク）が大きければ大きいほど、リターンも大きくなります。
※ この場合のリターンとは、波乗りの爽快感のこと。

投資においても、リターンを得ようとするなら、リスク（波）を引き受けなければなりません。より大きなリスクを引き受けた者だけが、より大きなリターンを獲得することができるのです。

今から600年前、リスク（波）とは無骨で荒々しいものでした。はっきり言って投資は、一か八かの命懸けの行為だったのです。今より投資できる資産はずっと少なく、多くの人は財力に限りがあり、したがってリスクを取って投資を行える人間も、限られていました。大きな投資を行おうと思えば、貴族や商人に取り入って資金を援助してもらう必要があったのです。

当時、「未来」といえば、ただ現在の延長上にあり、人々は運命を受動的に受け入れていました。（つまり、明日が今日と変わらないことに、価値を置いていたわけです）そして篤い信仰心から、「未来」についてあれこれ詮索することは、神の御心に反すると考える人もいました。未来とは、真っ暗な洞窟のようなものであり、そこに光を当てることができるのは「神のみ」と信じられていたのです。

ところがルネッサンスの時代となり、「未来はただ恐ろしいものではなく、機会（チャンス）をもたらしてくれるものだ」という考え方が徐々に広がり始めます。不確実性の塊である未来に蓋をしてしまうのではなく、

不確実性があるからこそ、明日が今日とは違った日になり得る、つまり『可能性』というものが開けるのだと、私たちの先人は思い始めたのです。

投資という作業をしっかりと定義してみますと、

「投資とは、不確実な未来に向けて、あなたのお金とエネルギーを注ぎ込む行為」ということになります。

私たちの先人は、多くの人が投資に参加し、同様のリスクを引き受けることで、『リスクの細分化』が可能になることを発見しました。また、さまざまな投資対象を見出し、それらを金融商品に仕立てていったのです。

では、リスク（波）を引き受けるとは、

「勇気があるか、ないか」ということなのでしょうかね？

いいえ、そうではありません。投資におけるリスクとは、決して

「克服」するものではなく、上手に手なずけて「共存」するものなのです。

例えば、株式市場という「いちば」は、

あなたやわたしのことを、いっさい考慮してくれません。

今月投資を始めた村山さんのことも、来週定年退職するので、ポートフォリオの一部を解約しようとしている川口さんのことも、市場はまったく気にしません。「いちば」はただ冷酷に、上がる時には上がり、下がる時には下がるのです。

「天気と市場は、あなたの思惑に関係なく動く。」

あなたが市場をコントロールすることは出来ませんし、また、コントロールできるのでは？と思うこと自体危険です。

誰もがいちばん安い時に株式を買って、いちばん高い時に売りたいと思いますが、それは言ってみれば、一介の個人が、刻々と変わる「いちば」の意思を逐一把握できるという「思い込み」であり、現実には極めて困難なことなのです。

私たちに唯一できる、リスクとの共存の仕方は、

「時間を味方につけること」です。具体的にいいますと、

市場が変動する大きな波（リスク）を、「時間」という澱の中に閉じ込めてしまうのです。長い「時間」の中でやがてリスクは沈殿し、発酵し、その姿を変えていきます。

（つまり、リスクは捉え方によって、その姿を変えるものなのです）

毎日、毎日、株式市場の価格が変わるということは、毎日、毎日、明日に対する評価が変わっているということです。それは人間が、未来を恐れるのではなく、未来に立ち向かっている証拠なのだとわたしは思います。